

2016 年度事業報告

「分かち合う暮らし」—分かち合う経験・こころ・未来

2016 年度は、25 周年記念事業の実施と第 5 次 3 か年計画の初年度として、基本構想にあった、「分かち合うくらし」を支援者にアピールし、それぞれの分野で提言に沿ったアクションプランの実現を目指しました。

課題であった財源については昨年に引き続き生活クラブや福祉クラブ等関連団体の協力による「もったいないを国際協力に！」キャンペーンへの協力や、企業の社会貢献活動、年末募金により、多くの寄付を集めることができました。活動を知ってもらうことによる協力者の拡大をこれからも進めたいと思います。

自立支援プログラムでは、ネパールの活動地は 2015 年の地震の影響からプログラムの遅れもありましたが、順調に進み、モニタリングやスタディツアーも実施しました。また、復興支援として小学校の校舎建設も行いました。ラオスは、終了した活動地を訪問し、成果を確認しました。カンボジアは、支援先の保護シェルターを訪問し、支援内容についての話し合いを行ないました。気仙沼は、情報交換をしながら若者たちの活動の見守り続けました。

クラフトの販売は、専従スタッフの不在もありましたが、オリジナルのスカーフ等の販売に力を入れました。

国内活動は、ボランティアによる各チームが中心となり、イベントへの参加、学校等への出前講座、クラフト類の販売、広報誌の発行等活動を推進しました。

しかし 3 か年計画の大きな重点課題である「地球の木支援者を増やし次世代の担い手を育成する」ことについては、成果を上げることができずに次年度への課題となりました。

25 周年記念事業については「アジアの人々と 25 年」をキャッチフレーズに、ネパールからの招聘事業や支援先の様子を身近に感じられる企画を実施し、多くの参加を得ました。

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ 自立支援プログラム ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

I. 自立支援プログラム

(アジアにおける社会的に困難な境遇にある人々に対する生活基盤確立のための自立支援事業)

●ネパール● 大地震の被害から立ち直り、未来に向けた村づくりを

プログラム名	ネパール「幸せ分かち合いムーブメント」
目的	都市部と農村部、私立校と公立校で教育の質に大きな格差があるネパールにおいて、村にいながら質の高い教育を提供することで、若者たちの流出を防ぎ、地域のエンパワメントに資する。
支援地	カブレパランチョーク郡マンガルタール行政村、カルパチョーク行政村
支援対象者	マンガルタール村、カルパチョーク村の村民
現地パートナー	SAGUN (サグン)
事業費	1, 634, 268 円

●背景

ネパール大地震の影響とその後起こったインド国境閉鎖による燃料・医薬品不足により、カトマンズおよびネパール中部被災地の人々の生活は困窮している。支援地マンガルタール村では、今もほとんどの人が仮設住宅で暮らしている。若者たちは雇用の場がないため海外に出稼ぎに行き、過疎化はますます加速している。都市部と地方、私立校と公立校の教育の格差も広がる一方である。

このような状況の中、地震からの復興支援と並行して、教育を中心としたプログラムを継続しながら、より効果的な収入創出を図るプログラムにも力を入れ、村人たちと今後の中期計画を新たに立てる。

●成果

地震の影響により、遅れは出たものの、ほとんどのプログラムが実施され、より有効な収入創出の活動も含め、災害から立ち直ろうとする村人たちを勇気づけることができた。また、12月に行われた村全体の状況調査と住民集会は、今後必要な活動について村人と一緒に確認することができた。

●支援活動の実施報告

<教育支援>

- ・高校進学、継続のための奨学金の支給：11年生、12年生16名の学費を支援した。今年度は全員女子。
- ・高校生の作文コンテスト：2回実施。周辺地域の高校生延べ38名が参加。優勝者の作文は季刊誌「ロシ・ラハール」に掲載。生徒たちの書くことへの意欲を奨励することができた。
- ・作文トレーニング：実施しなかった。
- ・校外研修：実施しなかった。
- ・教師トレーニング：テーマは「子ども主体の教授法と課題」。18校が参加。元奨学生が助手を務める。学んだことが役立っており、生徒たちの行動・規律に改善が見られた。
- ・教師サポート：3人の小学校教師への給与補助とプログラムコーディネーターによる教育方法のアドバイスをを行った。

<生活改善支援>

- ・協同組合づくりのサポート：活動できなかった。
- ・貧困家庭への収入創出プログラム：ヤギの飼育では、10世帯にヤギ購入資金を貸与。2年後に回収し回転資金とする。また、返済された貸付金を財源とした融資金でトラクターを購入し、農産物の収量が増加した。
- ・植林：カルパチョーク村の山火事があった共有林に150の苗を植林。村人に100配布。植林の大切さを広めた。

<ムーブメント推進>

- ・中期計画の策定：マンガルタール村全世帯の状況調査と地区集会を実施。参加型で計画を立てることができた。
- ・地域住民の寄稿による季刊誌「ロシ・ラハール」を発行。増ページで地震を特集した。また、ともだちキャンペーンとしてネパールの高校生と日本の高校生とのハガキの交換（61枚）をおこなった。

●国内活動の実施報告

- ・現地調査：12月に調査を実施した。参加型中期計画の集會に参加し、地震の被災者支援の現場を訪問し、聞き取りを実施した。また、スタディツアーの下見もおこなった（2名）。
- ・報告会：ラオスチームと合同で12月の現地調査の報告を実施（2/11）。
- ・スタディツアーの実施：2017年2～3月に実施。（3名参加）。マンガルタール村とラスワ郡の村を訪問。
- ・「ロシ・ラハール」を読む会：1回実施。ネパールの教育事情についての記事を読んだ。
- ・ワークショップ実施：出前講座として、「ネパールわくわくバッグ」「タルー族の家族ゲーム」を各2回実施した。

●ラオス ● 村人の森を守る権利と生活改善の応援をする

プログラム名	ラオスの森林と農業プログラム
目的	村人の食料安全保障能力を高めるという観点から、村人自らが権利を知り、力をつけて森林保全や自然資源管理による食料を確保し、持続可能な農業による食料生産の向上をめざす。
支援地	サワナケート県（アサポン郡・ピン郡）の30村
支援対象者	上記、支援地の村民2,400世帯（JVC支援対象世帯数。その一部を地球の木で支援）
現地パートナー	日本国際ボランティアセンター（JVC）・ラオス サワナケート県農林局
事業費	915,781円

●背景

外国企業の進出が経済の成長をもたらしている一方で、大規模開発事業によって生じる環境や村人の生活への、負の影響に対する保障制度や法整備などが、十分に実施されるまでにはいたっていない。しかしこういった外国企業による土地収用のようなセンシティブな問題は、ラオス国内の NGO が問題提起するのは難しい状況があり、JVC を初めとする外国 NGO の役割が求められている。

村人が安定的な食料の確保を行なうため、農業生産力の向上とともに、権利意識の意識啓発など住民主体の土地森林保全の JVC の取り組みを引き続き支援していく。

●成果

JVC では 2014 年度～16 年度の事業の終了にあたり、JVC が去った後も各活動が現地の人々で継続的に行われるよう、村人と共に振り返りそれぞれマニュアルにまとめた。さらに郡当局にもデータを提出して引継ぎ、高く評価された。また、地球の木の国内活動では、新しいワークショップの実施、国内でのラオスコミュニティとのつながり、参加しやすいイベントの企画など活動が広がった。

●支援活動の実施報告（JVC が実施した以下の活動の一部を地球の木が支援）

<土地森林に関する権利の向上や意識啓発>

- ・参加型土地利用計画（PLUP）：ピン郡2村、アサボン郡2村で完了、土地利用地図の看板を設置した。スタッフをスイス政府支援のプロジェクトに2ヵ月派遣しPLUPの質向上を図った。
- ・意識啓発ドラマ・ワークショップ：DVDでの上映を3村で実施し、参加した村人に理解度調査も行った。
- ・法律研修：JVC スタッフと行政官が研修を受け、順次村を回りその村の問題に合った研修を実施し好評だった。イラストを用いた法律カレンダーを他団体と共に制作し、支援村に配布した。

<住民による自然資源管理>

- ・共有林設置活動：アサボン郡1村で村の境界線問題を解決して設置。他1村で共有林のルールを見直した。
- ・魚保護区設置活動：アサボン郡で2村、ピン郡1村で設置、行政に登録した。5月に6村の村人と他県の魚保護区の視察を行った。その後村に戻って様々な提案が出るなどの学びの共有があった。
なお、ジェンダー研修として、過去の設置村も含め魚保護区設置村を対象に、4、5月にジェンダー研修を7村で実施、男女共同参画に注力して活動を進めた。365名（男性237名、女性128名）が参加。

<十分な食料確保を目指した持続的農業>

- ・稲作・幼苗1本植え（SRI）：6、7月に研修を実施、122名が参加、うち7村で72名が実践。9月に実践者を中心に、経験交流を行った。収穫は例年より良好。
- ・ラタン植栽：4村で発芽研修を行ない、30名が参加。ラタン種発芽マニュアルを作成した。

<リスクを減らす農村開発活動>

- ・米銀行：5月に経験交流を行い、課題やその克服方法、運営上のポイント等を冊子にまとめ、設置した13村に配布した。
- ・牛銀行：3村で貸し出された23頭の牛が42頭に。先行した2村で8頭が2歳になり、第2グループ6家族に貸し出した。

<衛生的な水の確保>

- ・井戸：5村に深井戸（大）4基、深井戸（小）を4基、浅井戸1基の掘削を支援。計14回の修理研修を行い、17村158名の修理ボランティアが参加し32基の井戸が修理された。

●国内活動の実施報告

<今後の地球の木ラオスプログラムの方向性>

- ・外部からの意見やアドバイスも参考にしながら、活動の意義を改めて確認し、次期第3フェーズまで支援の継続を決めた。
- ・支援金の使途については、来年度よりJVCのプロジェクト全般に対してではなく、森林保全分野に絞り、主に研修や先進事例を見に行くスタディツアーなど、人材育成に使ってもらいたい旨JVCに要望した。

<報告会の開催>

- ・JVC東京事務所ラオス担当者よりプログラムの進捗状況を聞いた（7/25）。

・ネパールチームと合同で12月の現地調査の報告会を実施（2/11）。

<参加しやすいイベント開催>

・25周年記念事業としてラオス関連で2つのイベントを実施（「Ⅶ．設立25周年記念事業」を参照）。

<考案したワークショップの学校等での実施>

・出前講座として、ラオスワークショップ「森を守る・暮らしを守る」を実施（平楽中学校2年（5/3）、よこはま国際フォーラム（2/3、参加者22名））。

<ラオス現地訪問>

・12月にピエンチャン、サワナケートを訪問（2名）。

<フェアトレードの可能性の検討>

・実施しなかった。

●カンボジア● 折れない心で立ち直る女性たちを応援

プログラム名	カンボジア 保護シェルター支援
目的	被害者の女性たちが保護され、回復し、尊厳を取り戻し、新しい生活が始められることが出来るよう支援する。
支援地	プノンペン、シエムリアップ
支援対象者	DV・レイプなどの性的虐待被害者女性
現地パートナー	Cambodia Women's Crisis Center（CWCC）
事業費	550,405円

●背景

カンボジアでは、広がる経済格差の中で、家庭内暴力やレイプなどの被害にあう女性たちが後を絶たない。CWCCでは、被害に遭った女性たちを保護し、法的サポート（訴訟のためのサポートや証拠集めなど）、心のサポート（カウンセリングやセラピーなど）も行いながら、被害者たちの回復を助け、新しい生活を始めることができるように支援している。また、地域社会や行政とも協力し、女性や子どもたちの権利を擁護し、性的な暴力を容認しない社会への変革を提言していく活動をおこなっている。

CWCCの支援も3年目となり、支援の様子や現場である保護シェルターの状況への理解も深まってきた。2016年度は、保護シェルターで回復した女性たちが自立していく過程に焦点をあて支援を行なう。

●成果

プノンペン保護シェルターへの定期的な訪問により、より詳しい状況の把握やスタッフとのコミュニケーションも深めることができ、次年度の具体的な支援へ進める一歩となった。

●支援活動の実施報告

<保護シェルター運営支援>

- ・シェルターでの医療支援として23人のサバイバーに治療を行なった。
- ・シェルター入居者への食費を支援した。

<小規模事業開始の支度金を支援>

- ・3名のサバイバーが新生活を始めるために必要な物（米、毛布、マット、台所用品等）を支援した。
- ・5名のサバイバーにそれぞれ異なる事業（①発酵ほうれん草（高菜）の販売、②野菜栽培・販売、③さとうきびジュースの販売、④モーター修理、⑤野菜栽培と販売）への支援を実施。

●国内活動の実施報告

<現地報告会／支援者との訪問ツアー>

- ・ギャラリーや地球の木カフェでの現地報告会や支援者たちとの訪問ツアーは、実施には至らなかった。

- ・10月（2名）、3月（3名）の2度、保護シェルターを訪問し、活動の進捗を確認した。
- <子どもたちの衣料(リサイクル)の呼びかけ>
- ・呼びかけを行ない、10月現地訪問時にCWCCのプノンペン保護シェルターに届けた。

●気仙沼 ● 地元のためにがんばる若者を応援する

プログラム名	気仙沼 Tree Seed 応援
目的	東日本大震災で被災した気仙沼で、仮設住宅に暮らす高齢者や子どもたちが心身ともに、健やかに暮らせるように、地元の若者たちが立ち上げた NPO 法人 Tree Seed を通じて支援を行なう。
支援地	気仙沼市
支援対象者	気仙沼市の被災者、市民
現地パートナー	特定非営利活動法人 Tree Seed
事業費	435,048円

●背景

東日本大震災で甚大な被害を受けた地域のひとつ、宮城県気仙沼市。地球の木は、緊急支援・復興支援に携わってきた若者たちが、地元気仙沼の復興のために NPO を立ち上げ、活動するのを側面支援してきた。6年を経ても、現地では元通りの生活が戻ったわけでもなく、新たな歩みも踏み出せていない多くの人々がいる。引き続き Tree Seed の活動を支援していくと共に現地訪問や復興支援まつりへの参加を通して復興の一翼を担う。

●成果

気仙沼をはじめ、他地域を視察したことで6年が経過した被災地の状況を把握することができた。また、Tree Seed への支援を通じて、取り残されがちな人々に寄り添う支援に貢献することができた。

●支援活動の実施報告（NPO 法人 Tree Seed の活動への支援）

<Tree Seed の実施する縁側事業（復興住宅への入居待ち高齢者の交流の場づくり）、見守り支援、こどもの「運動教室」への支援>

- ・縁側事業では本人だけではなく周りの人々も巻き込める状況（お誕生会・趣味の会）を創出した。その企画事業費を支援した。

- ・こどもの運動教室は12月、1月に実施。スタッフの交通費を支援した。

<Tree Seed 関係者、仮設住宅に住む人々との交流>

- ・現地訪問の時に、元仮設住宅居住者の家を訪問した。

- ・生活クラブ神奈川主催の「復興支援まつり」に Tree Seed と一緒に参加し、気仙沼の現状を発信した。

<復興支援バスツアーの実施>

- ・バスツアーは実施には至らなかったが、東日本大震災復興支援ネットワークかながわの参加団体を中心に現地訪問を実施。気仙沼をはじめ、他地域を視察し復興支援へ向けて新たな原動力を得た。

II. 緊急支援

(世界各国の自然災害・社会的危機等による被災民に対する緊急支援事業)

●ネパール大地震● 災害後のより安心できる環境づくり

プログラム名	ネパール大地震被災者支援
目的	ネパール大地震によって被災された住民の暮らしの復旧・再生に寄与する
支援地	カブレパランチョーク郡マンガルトール行政村および他近隣行政村
支援対象者	支援地の被災者
現地パートナー	SAGUN (サグン)
事業費	2,590,920円

●背景

ネパール中部で2015年4月に発生した大地震と5月の余震により、カトマンズを含む中部地域が大きな被害を受けた。支援地であるカブレ郡マンガルトール村では、人的被害は少なかったものの、住居や学校などの建物の被害は大きく、約9割の家と村内の公立校9校中8校が被害を受けた。2016年2月までに、第1次支援（緊急時デント、医薬品配布）、第2次支援（仮設シェルター建設、技術研修）を実施し、現在第3次支援として補助教室の建設（助成：かながわ国際交流財団）を始めている。

●成果

補助教室を2つの小学校に建設した。2学年を1教室で同時に授業をせざるを得なかった学校の環境改善に役立った。2校を訪問したが、そのうち1校には初めて訪れ、教員、児童と交流することができた。

●支援活動の実施報告

<補助教室建設>

- ・チャトレピパル小学校は8月に、ブメスタン小学校は10月31日に完成した。

<現地訪問>

- ・2016年12月に訪問。仮設シェルターを支援した地域の人たちから聞き取りをおこない、補助教室を視察した。
- ・2017年2～3月にスタディツアーで訪問。チャトレピパル小学校の校舎の落成式に参加した。

<必要とされている支援についての話し合い>

- ・12月訪問時に、敷物や家具が揃っていないため補助教室が使われていなかったことから、必要備品の追加支援（15万円）をおこなった。
- ・地震による被害が大きかったポカリナラヤンスタン村への収入創出の支援を決めた。

●国内活動の実施報告

<会員のいる地域や支援者対象に報告会を実施する>

- ・7/14 WE21 とつかで報告会
- ・3/11 かながわ国際交流財団主催講演会「災害をきっかけにした人づくりの国際支援」にパネリストとして参加（市民活動フェア2017 かながわ県民センター）

<会員及び支援者に事業報告書を作成する>

- ・被災者支援の事業報告書を作成し、配布した。

●その他●

- ・その他の緊急救援は実施しなかった。

Ⅲ. 交易販売事業

(相互の自立に役立つ生産物の交易)

●実施報告

- ・イベントやお祭りなど(計12回)で地球の木の紹介をしながら「幸せ分かち合いクラフト」の販売を行った。
- ・オリジナルフェアトレード品の企画、生産、販売を行った。
- ・生活クラブ生協(共同購入1回・デポー販売13回)、福祉クラブ生協(共同購入2回)と協力して販売を続けた。
- ・新規販売先の開拓:インターネット販売を含め、新規販売先の開拓にはいたらなかった。
- ・クラフトチームを立ち上げ、協力体制を構築:有償ボランティア制度を採り入れ、デポーでの販売担当者の不足を補うことができた。担当スタッフを募集し2月に採用した。

●成果

デポー販売では有償ボランティア制度を取り入れ、地域からの新しいメンバーの参加を得ながら行なうことができた。

Ⅳ. 社会教育事業

(相互理解を深めるための交流ならびに国際協力推進のための社会教育事業)

●実施報告

<出前講座>

- ・出前講座を実施(小学校1校、中学校3校、高校2校、よこはま国際フォーラム1回)。
- ・生活クラブ生協で行なうエコロ共済事業は依頼がなかった。
- ・ファシリテーターの研修会は実施しなかったが、新しいワークショップ「ラオス 森を守る・暮らしを守る」を作成し、2回実施した。また、グローバルゼーションについて考える教材として「マジカルバナナ」が評価されたことを受け、「オリンピック・パラリンピック教育推進のための教育支援プログラム集」に掲載され、出前講座の依頼が増えた。
- ・リーフレットを改訂した。

<地球市民教育>

- ・25周年記念事業として、お話会やラオス文化センター訪問ツアーなど、参加しやすい企画を実施し、「分かち合う暮らし」を発信した。(「Ⅶ. 設立25周年記念事業」を参照)
- ・あーすフェスタかながわ2016(5/14-15)に出展した。また、実行委員・企画委員として参加した。
- ・第16回南北코리아と日本のともだち展(2/17-19 アーツ千代田3331、絵画展開催に協力、来場者のべ437人)
- ・第4回外国人学校の子どもたちの絵画展(2/21-3/20 横浜中央図書館、閲覧者約16,600人)に協賛・実行委員として参加した。
- ・「共に生きる」学習会を実施した(1/26 参加者29人)。
- ・田島征三さんの「ラオス森の絵本」(仮称)について絵本作家の田島征三さんとの協議は進まなかった。

<地域活動>

- ・地域での報告会や学習会は実施できなかった。
- ・下記イベントに参加し、地球の木の活動紹介を行った。
鎌倉市市民活動の日フェスタ(5/21,22)、湊フェスタ(5/22)、藤沢市民まつり(9/24)、ひらつか市民活動センターまつり(9/25)、なか区民センターまつり(10/9)、かまくら国際交流フェスティバル(11/11)、大和カッコーフェスタ(11/22)、オルタ館フェスタ(11/23,26)、ちがさきサポセンワイワイまつり(2/26)

- ・ネパールの活動紹介ツールを作成した。また、ラオスの活動紹介ツールを作成中。
- ・これまでの地域活動に参加して下さった方に呼びかけをしたが、反応が得られず、活動メンバーの増員を図ることはできなかった。

＜その他の販売＞

- ・「国際協力カレンダー」の販売を行った（生活クラブ生協、福祉クラブ生協の協力を得て 644 部販売）。
- ・開発教育教材「マジカルバナナ v3」の販売を行った（本体 11 冊、CD-ROM5 枚、カード 12 セットを販売）。
- ・イベントで活動のアピールをしながら食品の販売を行った（あーすフェスタ、グローバルフェスタでのちぢみ販売など）。

●成果

出前講座や地域のイベントなどで「参加しやすい多様な方法で企画を行なう」ことができたが、新しい担い手については課題が残った。

V. 広報・政策提言などの事業

（社会教育事業に関して、機関誌等の広報活動ならびにそれらを通して行なう政策提言などの事業）

●実施報告

＜広報活動＞

- ・会報誌を 4 回発行した。25 周年を意識した誌面構成とした。
- ・ホームページ、Facebook での情報発信を行った。また、17 年度にパンフレット、ホームページ改訂に活用できる国際協カシステム（JICS）NGO 支援の助成金に申請し採択された。

＜政策提言＞

- ・KOREA こどもキャンペーン（呼びかけ団体）として、「朝鮮半島東北部水害支援のおねがい」の呼びかけを行なうと同時に「朝鮮民主主義人民共和国における水害への人道支援を行なうにあたっての立場表明」を発表した。

VI. ネットワーク活動

（地球の木の目的にかなう事業を行っている団体との情報交換および協力事業）

【理事・運営委員などとして運営に参加する団体】

理 事：横浜 NGO 連絡会（YNN）、かながわ生き生き市民基金

運営委員：かながわ復興支援ネットワーク（YNN）※「ふるしきネット」に改称

委 員：キララ賞選考委員会

実行委員：「あーすフェスタかながわ 2016/2017」実行委員会・企画委員、

「南北 코리아 と日本のともだち展」実行委員会、

「東日本大震災 復興支援まつり」実行委員会、「外国人学校の子もたちの絵画展」実行委員会

そ の 他：KOREA こどもキャンペーン（呼びかけ団体）、あーすネットかながわ幹事会（幹事）、

東日本大震災復興・支援ネットワークかながわ（幹事）、ビピンバネット（参加団体）

NGO 非戦ネット（賛同団体）

VII. 設立 25 周年記念事業

●実施報告

25 周年記念事業として以下のイベントを企画・開催した。

- ・講演「設立 25 周年に寄せて」清水俊弘氏（地球の木顧問）（5/29 37 名）
- ・ラオスお話し「ラオスで子育て 12 年」名村雅代氏（7/3、参加者 22 名）
- ・地球の木講座『ネパールの開発の第一人者カマル・フヤルさんが語る－震災復興』（9/25、参加者 40 名）

- ・愛川町ラオス文化センター訪問「日本の中のラオスに出会う」（10/16、参加者 20 名）
- ・カンボジアの報告会は実施することができなかった。

●成果

計 4 回の企画を実施し、のべ 119 名の参加者を得た。企画時に新規層に参加してもらうことを目指したのもあり、わずかではあるが会員獲得に繋がるなどの成果を得た。

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

組織運営など

●実施報告

＜情報管理を強化し、情報公開を進める＞

- ・ウェブ上のカレンダーでスケジュール管理および共有できるようにし、運用した。

＜ファンドレージング＞

- ・クリック募金（gooddo）に参加したほか、チャリティ演劇公演の寄付の受け皿になるなど、寄付ツールの多様化をはかった。
- ・15 年度に続き、生活クラブ生協、福祉クラブに協力を依頼し、「もったいないを国際協力で！」キャンペーンとして書き損じハガキ、切手、貴金属などの募集をおこない多くの物品寄付を集めることができた。

＜ボランティア、インターンの積極的な受け入れを行なう＞

- ・インターン 1 名を受け入れた。

＜その他＞

- ・第 18 回総会にて理事改選期にあたり選考委員会を設置した。

地球の木会員数（2017 年 3 月末）
正 会 員： 153 名
サポート会員： 547 名（内団体会員 5）
合 計： 700 名

2016 年度入退会者数と主な退会理由
入 会 者： 9 名
退 会 者： 29 名
・ 経済的理由 ・ 活動整理 ・ 体調不良など